

## カボチャ（早熟）

		1	2	3	4	5	6	7	8
作型	トンネル二重								
	トンネル一重								
主な作業		播種	マルチ	定植	整枝誘引	交配	摘果	敷玉直	収穫

### 技術体系

#### 1 作型の特徴

保温による早だし、水田有効利用が可能な栽培である。播種時期に合わせた保温装置をおこなう。

トンネル2重被覆は、1月上～下旬播種、2月中～3月上旬定植、3月下～4月上旬交配、5月上旬～6月収穫、トンネル1重被覆は、2月上旬播種、3月中旬定植、5月上旬交配、5月下旬～7月下旬収穫である。

#### 2 適地地域

全域

#### 3 栽培条件

西洋カボチャは、平均気温22～23℃を越すと澱粉の蓄積が弱り、さらに高温になると生育が著しく阻害される。

##### (1) 温度

種子の発芽は最低15℃、最高温度25～30℃である。

ウリ類の中では最も低温性の作物で、生育適温は17～20℃である。

##### (2) 土壌条件

根群はやや浅く、広く発達する。比較的土壌は選ばないが、一般的には砂質土から埴土に適し、pH5.5～6.8を好む。

#### (3) 花芽分化

カボチャの雌花は親づるの7～8節より着生し、親子づるとも4～5節おきにつく。

カボチャは低温短日条件で雌花の着生は早まる。日本カボチャは敏感で、西洋カボチャは、鈍感である。

#### 4 施設装備

##### (1) トンネル

#### 5 経営目標

(1) 収量 2.5 t/10a

(2) 投下労働時間 230時間/10a

(3) 所得率 25%

(4) 経営規模 40a

(家族労働力2人の場合)

### 栽培技術

#### 1 品種と特性

「えびす」

草勢、吸肥力ともに、多肥栽培すると過繁茂になりやすい。果実が大きく、多収性であるがやや晩熟である。

「くりじまん」

生育が旺盛で着果も安定している。果実の肥大が優れ多収である。果実の成熟は「えびす」並である。

## 「くりあじ」

草勢強く、低温伸長性も比較的良好で、着果も安定している。果実は濃緑色のくりの実を逆にしたような腰高で果重は1 kg前後である。熟期は早生種である。

## 「近成芳香」

早生で雌花の着生が多い。

## 2 育苗

### (1) 播種

ハウス内に、1.2 m幅で播種床をつくる。断熱材として発砲スチロール、籾がらなどを敷き、その上に畑の土を3 cm厚さに入れ、電熱線を $m^2$ 当たり70~80W配線し、さらに土を3 cm入れる。十分に灌水したのち、ポリフィルムを敷き、心土からの水分蒸散を抑え熱伝導をよくする。

温床ができあがったら、床土を詰め十分に灌水した播種箱を並べ、トンネルをかけ通電して床温の上がるのを待つ。床面積は、10 aあたり1.5~2  $m^2$ 必要である。

種子は10 aあたり5 dlを育苗箱か、または魚箱等に播種する。播種方法は条播きの方が、鉢上げ時に根痛みが少ない。

播種後灌水し、その上に新聞紙をかけ、さらに灌水する。

発芽温度は、27℃程度に管理する。子葉が地中より立ち上がり始めた夕方に、新聞紙を取り除き、2~3日かけて徐々に温度を下げる。

### (2) 鉢上げ

鉢上げ1週間前にはポリポットに土入れし、十分に地温確保をしておく。

発芽後、子葉が八分展開時、鉢上げする。鉢の径は12~15 cmを使用する。育苗日数45日で本葉5枚程度に仕上がるような温度管理を行う。地温は15℃以下にならないように管理する。温度と水で徒長が助長されるので注意する。

### (3) 灌水

灌水は苗がしおれない程度の水量で行う。

灌水は原則として午前中の灌水とし、夕方は行わない。夕方の灌水は徒長苗になりやすい。

### (4) 鉢ずらし

本葉2~3枚時、葉と葉が重ならないように鉢の間を広げる。

### (5) 苗のならし

定植1週間前から苗の馴化を実施する。最低夜温を定植前日までに10℃まで徐々に下げ、定植による植え傷みを防止する。

## 3 施肥

施肥量 (kg/10a)

	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
基肥	12	22	12
追肥	6	6	6
全量	18	28	18

追肥は、草勢により増減させる

## 4 定植準備

畦幅3.6~4 mとし高畦栽培とする。定植1ヶ月前に堆肥と元肥を施用するが、遅くとも2週間前にはマルチやトンネルを張り、地温を確保しておく。

## 5 定植

晴天の日の午前中に定植を行う。灌水は少量灌水とし、地温確保に努める。

(栽植様式)

	畦幅 c m	株間 c m	株/10a
3本仕立て	3.6	70	390
	4.0	65	380
2本仕立て	3.6	40	690
	4.0	35	710

## 6 温度管理

子づるが伸び始めるまでは日中は最高気温30℃とし、25℃を維持する。20~30 cm子づるが伸びたら、最高気温28℃とし22~23℃を維持する。晴天の日は換気に努め、光が当たるようにする。

## 7 整枝、誘引

子づる3本仕立ての場合は、本葉5枚を残し、早

めに摘心し、親づるの2, 3, 4節から出た子づるを伸ばす。2本仕立ての場合は本葉4枚を残し、早めに摘心し、親づるの2, 3節から出た子づるを伸ばす。

誘引はななめ誘引とし、晩霜の恐れがなくなるまでトンネルに入れておく。

えびす系は雌花の着果が多い品種であり、一斉に着果させると果形の良いものができる。

着果節位以降は草勢により、強い場合は取り除き、弱い場合は残すように適宜実施する。

## 8 交配着果

1番果は8～12節に着果させるが、草勢が強い場合は8節程度とし、弱い場合は次の雌花が着生する12節前後に付けるようにする。

3本仕立ての場合、3個着果させるようにする。

交配は、午前中の早い時刻に行う。

## 9 追肥

着果すると草勢が弱るので、着果確認後、トンネル外側に追肥する。

## 10 玉直し

果実に敷きワラをするか、シートを使用し、果実全体に着色させ、品質向上を図る。

## 11 収穫

果実が着果期（えびすで35日～）より収穫できるが、果梗部全体にコルク状の皮目が発生した完熟果（栗質で甘味が強く市場での評価が良い）を収穫するように努める。